

**主 題：キリストの福音を生きる教会④****聖書箇所：コロサイ人への手紙 1章6－7節****テーマ：神様に喜ばれる教会の内に働く“福音の力”とはどのようなものか？**

私たちはここ数回にわたって、コロサイ1章、特に3－8節の部分から、キリストの福音を生きる教会について学んできました。その中で、神様に喜ばれる教会が持っている特徴、信仰・愛・希望と三つの大切な要素を著者パウロは教えてくれていました。私たちひとりひとりの歩みにとっても決して欠かすことのできないものを改めて考えることができました。きょうは残された最後の部分6－7節、特に6節を中心に見ていきたいと思えます。ここにも非常に重要な真理が記されていますので、一緒によく考えてみましょう。1－8節までをお読みします。これまでのことも思い返しながら見てください。

**コロサイ1：1－8**

「:1 神のみこころによる、キリスト・イエスの使徒パウロ、および兄弟テモテから、:2 コロサイにいる聖徒たちで、キリストにある忠実な兄弟たちへ。どうか、私たちの父なる神から、恵みと平安があなたがたの上にありますように。:3 私たちは、いつもあなたがたのために祈り、私たちの主イエス・キリストの父なる神に感謝しています。:4 それは、キリスト・イエスに対するあなたがたの信仰と、すべての聖徒に対してあなたがたが抱いている愛のことを聞いたからです。:5 それらは、あなたがたのために天にたくわえられてある望みに基づくものです。あなたがたは、すでにこの望みのことを、福音の真理のことばの中で聞きました。:6 この福音は、あなたがたが神の恵みを聞き、それをほんとうに理解したとき以来、あなたがたの間でも見られるとおりの勢いをもって、世界中で、実を結び広がり続けています。福音はそのようにしてあなたがたに届いたのです。:7 これはあなたがたが私たちと同じしもべである愛するエパfrasから学んだとおりのものです。彼は私たちに代わって仕えている忠実な、キリストの仕え人であって、:8 私たちに、御霊によるあなたがたの愛を知らせてくれました。」

さて、いま一度ここ数回にわたって考えてきたことを振り返ってみてください。これまでに学んできたように、この手紙の著者であるパウロはコロサイの兄弟姉妹の様子をエパfrasから聞かされて、そのことで神様に感謝をささげていました。直接彼らに会ったことはなかったのですが、彼らのうちに、本当に救われている者に見られるある特徴を見出していたからこそ、パウロは心から喜んでいました。その特徴とは一体何だったか？全部で三つありました。

**●これまでの内容：神様の喜ばれる教会に見られる三つの特徴 4－8節：****1. キリスト・イエスに対する信仰 4 a 節**

一つ目に見たのは「キリスト・イエスに対する信仰」でした。コロサイの兄弟姉妹たちはエパfrasを通して初めて福音が伝えられた時、その真理を自分のこととして心から信じた者たちでした。彼らはイエス・キリストを自分の救い主として信じ受け入れ、この方を自分の主人として愛していたからこそ、すべてを捨てて、日々を忠実に歩もうと生きていたのです。そんなキリストに対する信仰、それが彼らのうちにはっきりと見られた最初の特徴でした。

**2. すべての聖徒に対する愛 4 b、8 節**

またそれに加えて、彼らは「すべての聖徒に対する愛」というものも持っていました。コロサイの兄弟姉妹たちは、自分たちの主だけをただ愛していたのではありませんでした。彼らは、自分たちと同じように、同じ主によって救われたほかの兄弟姉妹のことをも心から愛していたのです。彼らは喜んで犠牲を払い、分け隔てをすることなく互いに仕え合おうと歩んでいた者たちでした。そのような御霊による愛こそ、彼らのうちに見られた二つ目の特徴でした。

### 3. 天にたくわえられてある希望 5節

そして最後、先週見たことですが、彼らはそのような信仰と愛に加えて、「天にたくわえられてある希望」というものを持っていました。コロサイの兄弟姉妹たちは、揺るがぬ望みを将来に抱いて日々を生きていた者たちだったのです。彼らは一時的なものではなくて、永遠に価値のあるものに確信を置いていました。いつの日かキリストと永遠をともにする日がやって来る、と確信していたからこそ、今のさまざまな困難や苦しみに直面してなお、堅く立ち続けることができたのです。その天にある希望こそ、彼らのうちに見られた三つ目の特徴でした。

皆さん、この三つの特徴、信仰と愛と希望というものを見てきて、間違いなくすばらしい教会だと思いませんか?! コロサイの兄弟姉妹たちは、神様に喜ばれる群れとして歩んでいました。歩んでいたのが明らかであるので、実際に見たことがないパウロでさえ、彼らの姿をただ耳にただけで神様に感謝をささげていたのです。

でも、そんなすばらしい教会の三つの特徴について触れていたパウロは、最後にもう一つ重要なことをここで記していました。パウロは三つの特徴について触れた後で、彼らのうちに働いて希望を生み出していた、彼らの歩みを支え続けていた“ある力”に目を留めていました。もっと言えば、コロサイの兄弟姉妹たちのうちに働いていた力、だけではなくて、コロサイの教会から出て世界中でも見られる力、にパウロは目を留めていました。その力がコロサイの教会のうちにも、また全世界にも働いていたのです。そしてそのことでパウロは感謝をささげていました。一体、最後にパウロは何に目を留めていたのでしょうか? 何が働いていたのでしょうか?

#### ○キリストの福音が持っている力 6-7節:

皆さん、その力こそ、「福音」でした。キリストの福音というものがコロサイの人々のうちにも働き、全世界の人々のうちにも働き、彼らのうちに「実」というものを実らせ続けていたのです。パウロはそんな福音の持っている偉大な力について、6節を中心に改めて明らかにしてくれていました。福音とは、一体どんなに力を持ったものなのか? 福音とは、どんな力を及ぼすものなのか? そのことについてパウロはここで教えてくれていました。確実に言えるのは、コロサイの信仰者たちのうちに働いて彼らを変えていたその“福音の力”というのは、今の私たちのうちにも働いて、私たちを変えることのできる偉大な力を持ったものだということです。聖書を見れば、福音というのは、すばらしい力を持ったものとして描かれていました。では、一旦立ち止まって考えてみましょう。果たして私たちは本当に“福音のうちに見られる力”というものを正しく理解しているのでしょうか? 福音が持っている力を、今私たちは本当に知っているのでしょうか? すばらしいことがここに書いています。ですから一緒によくみことばを見てみましょう。このみことばが皆さんの励ましになることを心から祈っています。

では、「福音」について考えていきます。6節にこう書いていました。「この福音は、あなたがたが神の恵みを聞き、それをほんとうに理解したとき以来、あなたがたの間でも見られるとおりの勢いをもって、世界中で、実を結び広がり続けています。福音はそうにしてあなたがたに届いたのです。」2017年版の聖書持っている方がおられたならちょっと混乱したかもしれません。というのも2017年版ではこのように訳されています。「この福音は、あなたがたが神の恵みを聞いて本当に理解したとき以来、世界中で起こっているように、あなたがたの間でも実を結び成長しています。」と。訳が違っていましたね。実を言うと、この箇所というのは、そもそも日本語に訳するのが難しい箇所でした。皆さんが持つておられる新改訳聖書の欄外の6節のところを見てみると、別訳と書いていてまた異なる訳が載っているかと思えます。つまり私たちが持っている新改訳聖書の第2版、第3版も訳が違うし、2017年版も訳が違うし、また別訳のところにも異なる訳が書いてあって…。いろんな訳が載っているのです。それもそのはず、この箇所は少し訳するのが難しいものでした。勘違いして欲しくないのは、もちろんどれをとっても言わんとして



忠実に語る弟子たちによって宣べ伝えられ続けていたのです。そしてその結果どうなったかと言えば、あらゆるところで真理が広がっていき、多くの人たちが神様によって救われていきました。福音は、確かに全世界に広まり続けていたのです。このように私たちはイエス様の弟子の模範や、弟子の姿や、使徒の働きを通して、キリストの福音が広がり続けていったということを見て取ることができます。でもそれに加えて、ほかのだれでもないパウロこそ、全世界に広がる福音の力の偉大さをだれよりもわかっていた人物でした。だからこそ、そのパウロがこのようにはっきりと宣べるのです。ローマ1：15－16を見てみるとそこにはこう書いていました。「:15 ですから、私としては、ローマにいるあなたがたにも、ぜひ福音を伝えたいのです。:16 私は福音を恥とは思いません。福音は、ユダヤ人を始めギリシア人にも、信じるすべての人にとって、救いを得させる神の力です。」パウロは、福音が持っているその力がどれほど偉大なものなのかということ、心から知っていました。ただの知識としてではありません。彼は本当にその持っているものの力をわかっていたのです。だからこそ、「私は福音を恥とは思いません。」と大胆に述べることができました。

では、どうです？例えば、皆さんはだれかに、「あなたは福音を恥と思っていますか？」と言われたら、何と答えます？おそらく「いいえ、私は恥とは思っていません。」と、もちろんそう言われると思います。でも私たちが理解したいことというのは、パウロが置かれていた状況はとてつもなく難しいものだったということです。パウロは確かに「福音を恥とは思いません。」と大胆に言ったのですが、彼が置かれていた状況は私たちとは全く異なるものでした。その違いを少し一緒に考えてみましょう。例えば、今見込みことばで、パウロはぜひ福音を伝えたいと願っていました。彼はローマの町に行きたかったのです。ローマの町で福音を伝えたいのだと。でもそのローマの町というのは、どんなものよりもカイザル（ローマ皇帝）こそが最高の存在だとして扱われていた場所でした。この皇帝こそが神としてほめたたえられる存在だったのです。では、考えてみましょう。町のすべての人たちが、「カイザルこそ神だ」と扱っているような中で、「カイザルなど神ではない。イエス・キリストこそが唯一の神様だ。」と宣べ伝えようものなら、どうなってしまうと思います？容易に想像できるように、人々は間違いなくパウロを捕らえて殺そうとするでしょう。皇帝に逆らう反逆者として処刑されても当然だったでしょう。そのような中であって、パウロが福音を恥じて語ることをためらったとしてもおかしくはなかったと思いませんか？またそれだけではありません。例えば、それに加えて、パウロの人生そのものを思い返して、彼が通ってきた道を考えてみれば、それだけでも彼が福音を恥として妥協していたとしてもおかしくはなかったと思いませんか？パウロは福音のためにむち打たれ、石打ちに遭うことがありました。福音のために牢に捕らえられることもありました。福音のために人々からののしられ辱められることもありました。福音のために労苦し、福音のために眠れぬ夜を過ごし、福音のために飢え渴きを覚えて、福音のために死に直面することだってあったのです。もし福音を恥じることが許されるそんな権利を持っている人物がいるとすれば、パウロこそ、その人物だと言えるかもしれません。パウロは福音によって想像を絶するほどの苦しみを経験していたのです。でもパウロは、それでもなお福音を恥とすることはありませんでした。彼は人々を怒らせないようにと、真理をごまかすこともしませんでした。人々から嫌われないようにと、その真理を妥協することもしませんでした。人々が受け入れやすいようにと、その真理の一部を隠して伝えることもしませんでした。彼はどんなときであろうとも、その福音の真理を大胆に語り続けていたのです。相手がだれであろうと、どんな状況に置かれていようと、彼には関係ありませんでした。思い返してみれば、あのアグリッパ王様の前でも、彼は大胆に真理のことばを宣べ伝えるのです。そのことばは使徒26章に書いているのですが、パウロのことばを聞いた王様はこう言っていました。「あなたは、わずかなことばで、私をキリスト者にしようとしている。」（使徒26：28）と。聞きました？皆さん。これだけを聞いたとしても、パウロがどれほど熱心に、しかもストレートに福音を正確に伝えようとしていたかを私たちは読み取ることができるのです。でも、そのことば

に対して、パウロがこのように答えていました。そのことが使徒26：29に書かれていました。「パウロはこう答えた。「ことばが少なからうと、多からうと、私が神に願うことは、あなたばかりでなく、きょう私の話を聞いている人がみな、この鎖は別として、私のようになったださる事です。」」と。凄くと思いませんか？人間的に考えてみれば、彼は恐れやためらいを抱いてもおかしくないような状況にありました。でもそれでもなお、彼はキリストの福音を捻じ曲げることはせず、まっすぐに解き明かしていたのです。一体どうして彼はこれほどまでに揺るがなかったのでしょうか？どうして彼は、どんな状況にあったとしても福音を恥じることはなかったのでしょうか？それはひとえに、彼が福音の持つその力に確信を置いていたからでした。福音はユダヤ人を始めギリシア人にも信じるすべての人に救いをもたらすそんな神様の力である、と彼が信じていたからでした。ローマ1：16にそう書かかれています。「福音は、…信じるすべての人にとって、救いを得させる神の力です。」と。そして、その力を彼が疑わなかったのです。だからこそ、そんなパウロは別の箇所でもこのように宣べていました。Iコリント1：18また22-24「：18 十字架のことばは、滅びに至る人々には愚かであっても、救いを受ける私たちには、神の力です。」「：22 ユダヤ人はしるしを要求し、ギリシア人は知恵を追求します。：23 しかし、私たちは十字架につけられたキリストを宣べ伝えるのです。ユダヤ人にとってはつまずき、異邦人にとっては愚かですが、：24 しかし、ユダヤ人であってもギリシア人であっても、召された者にとっては、キリストは神の力、神の知恵なのです。」と。間違いなく、十字架につけられたキリストを宣べ伝えるということだけが、パウロにとって十分なものでした。パウロにとって、このキリストのことばというものを、福音というものを宣べ伝えること、それは、彼が語らなければならないただ一つのメッセージでした。罪と罪過の中に死んでいて、ただ滅ぶべき希望のないその罪人に対して、この福音こそが唯一救いを与えることができる神様の力なのだ、とパウロは確信していたのです。それしか、罪人を救う方法はない、と彼はわかっていました。だからこそ、そんな力を持っている福音を恥じることはありませんでした。どんなに頑なな者に対しても、そうです。どんなに自分と違う考え方を持っている人であろうとも、そうです。この福音は、信じるすべてのものに救いをもたらすことのできる神の力なのだ。全世界的な良い知らせを、彼は語り続けていたのです。

そのことを考えるとき、私たちもいろんなチャレンジを受けますが、果たして私たちはどうでしょう？私たち自身は、このキリストの福音の持っている力というものを正しく覚えているのでしょうか？私たちが福音を語るときに、私たちは、神の力であるこの良い知らせを妥協することなく、どんなときもまっすぐに解き明かそうとしているのでしょうか？それとも、置かれた状況や相手によって福音の真理を捻じ曲げたり、語ることをためらったりしないのでしょうか？私たちは時に相手の反応を気にしてしまうことがあります。怒らせたくない、関係をこじらせたくないと考えてしまうこともあります。でも、果たしてそんなとき、私たちは、キリストの福音が持っている力というものを、本当に信じているのでしょうか？私たちは、私たちが語ろうとしているその福音が、確かにそれを信じるすべての人に救いをもたらすことができる唯一の神様の力であると、そう確信を持っているのでしょうか？みことばははっきりと言っていました。「十字架のことば、キリストの福音は、ユダヤ人にとってはつまずき、ギリシア人にとっては愚かに思えるものです。」と。そんな愚かに思えるような福音を語ればどうなるか？当然、多くの人たちはそれを拒絶するでしょう。だって、愚かに見えるんですもの。価値を見出すことすらしようとしませんか？だって愚かに見えるんですもの。そのことばが愚かに見える者にとって、そのような反応をとることはある意味ごく自然なことです。だから皆さん、私たちが福音を伝えるときに、もしその人が「こんなものはいらない」と拒絶するなら、まさにみことばが私たちに教えていることなのです。でも、そんなときはいつも覚えることができます。この福音は、初めから変わることはない揺るがぬ真理だということです。この福音はどんな国であろうと、どんな文化であろうと、どんな民族であろうとあらゆる垣根を越えて、すべての人にもうすでに働き続けてきた神様の力でした。私たちがみ

ことばのうちを見るとときに、先に見た使徒の働きを見ていけば、神様のみことばが語られ、福音が語られたときに人々が変わられ続けていくその姿を見て取ることができるのです。聖書の中からだけではなくても、私たちが歴史を振り返ってみれば、そのように福音によって変えられてきた人々を見て取ることができます。この日本だけではなくて、世界中でそれが起こり続けているのです。そして何よりも皆さん、私たちもこの同じ福音によって救われました。私たちも変えられたのです。私たちが変えたわけではありません。私たちに働いたその福音が、神様の力が、私たちを変えてくれました。それによって私たちは救われたのです。それなら、その神様の力を自分のこととして知った私たちは、その福音をどう語ろうとするのでしょうか？ 私たちに託された責任、それは昔も今も変わっていません。今もなお変わらず、キリストの福音を宣べ伝え続けることです。ここに神の力が現されていると知っているなら、私たちはこの福音を大胆に宣べ伝えることができるのです。神様の働きを期待しながら、妥協することなく大胆に語り続けていくことです。福音は全世界的なものなのだ。皆さん、それだけ力があるものだという事です。そしてそれが一つ目に見てとれる偉大な力でした。

## 2. 働き：実を結び、成長し続ける

二つ目に見てとれるものは、福音が持っているその力の影響についてです。どのような働きをするのか、その影響とは「実を結び、成長し続ける」ということでした。でも、具体的にそれはどういうことなのでしょう？どのように働いて人々の間に影響もたらすのでしょうか？先の続きに戻っていただいて6節はこう続いていました。「世界中でも同じように、あなたがたの間でも実を結び、成長し続けています。」と。ここで皆さんに注目してほしいのは、この「実を結び、成長し続けています」というパウロのことばです。ここで二つことばが出ます。まず一つ目に「実を結ぶ」と訳されていることばには、「果実を実らせる」「種子を生み出す」そういった意味があります。植物に関連することです。またこれから「内側、内面に実を結ぶ」といった意味もあります。「人や何かの内側、内面に実を実らせる、実を結ぶ」という意味です。そして、もうひとつの「成長」と訳されていることばには、「範囲、サイズ、状態などを増加する、大きくする」という意味があります。何かの範囲やサイズ、状態、そういったものを大きくするのです。増加するのです。またそのまま「成長する」といった意味も持っています。ですから「実を結ぶ」ということを考えたときに、それは内面に実を結ぶという意味があり、そして「成長」と訳されていることばには、そのまま成長するとか、大きくするといった意味があるのだということ、私たちがことばの意味から読み取れるのです。そんな二つのことばがここに並んでいました。ことばの持っている意味からも、前者はどちらかというと内面に関して、後者はどちらかというと外面、外に関して触れているように見て取れるかもしれません。では、パウロはこれらのことばから何を言わんとしていたのでしょうか？これに関して学者たちの間で非常にいろんなことが話されています。私自身もすごく悩みました。その中で二つわかりやすい説明があったのでそれを皆さんに紹介したいと思えます。二人の先生がこんなこと言うのです。まずカーチス・ボーガンという先生はこのように説明していました。「『実を結ぶ』という言葉は、その信仰者の内に働く福音の力を指しているのでしょうか。『成長する』は、福音が急速に広まることを示しています。したがって『実を結ぶ』と『成長する』という二つの言葉は、それぞれ福音の持つ、内側の働きと外側への広まりを語っているのです。」また、ジョン・マッカーサー先生もこのように教えていました。注解書の中でこんなことばがあるのです。「福音は、個人の内面的な変化と教会の外面的な成長の両方に実を結ぶのです。二つの概念は相互に関連しています。個人の霊的成長は、新たに改心する者がキリストへとたどり着くよう導くのです。これが初代教会のモデルでした。」と。ポイントは内側の働きと、外側への広まりということ。つまりここで見て取ることのできる福音の力というもの、福音の効果、影響というものは、あまりにも素晴らしいものでした。コロサイの教会に届いていたその福音というのは、彼らのうちに何の変化ももたらさないような力のないものでは決してなかったのです。

では、届いた福音はどんな働きを成していたのか？まずそれは、福音を受け入れたコロサイの兄弟姉妹のうちに働いて、その内に実を实らせるものでした。彼らは福音を信じてただ救われてそれでおしまい、ではありませんでした。彼らに救いをもたらしたその力ある福音は、彼らの内に継続して働いて、神様に喜ばれる「御霊の実」というものをも生み出し続けていたのです。コロサイの教会にあった実として、いくつかのことを私たちは既に見ました。私たちが見てきた信仰や愛、希望そういったものも彼らの中に生み出されていたのです。パウロはそんな「実」というものを聞いて、確かに神様が彼らの内に働いているということを確認し、そして心から感謝をしていました。届いた福音はコロサイの兄弟姉妹の内に働いて実を实らせていたのです。でもその実というものは、コロサイの人々の間だけで終わりではありませんでした。福音が持っていた偉大な力は、コロサイの教会にのみ働いて、はいそれで終わり、ではなくて、世界中でも同じようにして実を实らせていたというわけです。コロサイの人々に生み出されていたその御霊の実は、同じようにキリストを真に受け入れた者たちの内にも見られるものでした。福音によって救われた者たちはみな、私たちが例外なく同じように、霊的な成熟を目指して神様に従って歩み、福音に根ざして今を生きていくのです。そしてそのように私たちがみことばに根ざして歩んでいくときに、神様が働いて、私たちの内に実というものが生まれてくるのです。それが信仰者の歩みでした。コロサイの教会に届いたその福音は、コロサイの教会の人たちの内に働いて実を生み出していただけではなく、同じ福音は外に出て同じように信仰者のうちにも働いて、その内に実を实らせていました。これだけでもすごい働きが福音にはあるのです。でもそれで終わりではありませんでした。

ここにもう一つ凄いことが書いているのです。それは、福音の働きが救われた者の内にもみ働くものではなかった、ということです。福音が持っているその力はコロサイの教会、また一定の救われた人だけに力を与えて終わりではありませんでした。救われた者の内に働くその福音は、同じようにほかの人々をその罪とさばきから救うことができる力もあるものでした。ですからコロサイの教会に働いた福音は、彼らの実を实らせ、全世界においても同じように実を实らせ、そしてまだ救われていない者のところにもますます広がって行って、そして彼らの内にもどんどんどんどん実を实らせるという働きをしていたということです。福音が語られて、それを信じた人たちが救われて、その人が成長して実を結び、そしてその人が福音を大胆に語れば、そこで救われる人が起こされて、その人が成長し、その人が実を結び、そしてその人が福音を語ることを通して、また別のところで救われる者が起こされて…その繰り返したということです。そのようにして福音は全世界へと広がり続けている、そのようにして全世界において信仰者が起こされているのだと。パウロはその福音の持っている力の影響の凄さをわかっていました。コロサイの教会だけではなくて、全世界に広がっていくその様子を彼は目の当たりにして神様に感謝をささげていたということです。福音が持っている働き、それは実を結び、成長し続けるものでした。人々の間で広がり続けていくものでした。それが二つ目に見て取れる福音の偉大な力でした。

### 3. 本質：神様の恵み

そして最後に三つ目に見て取れるもの、それは、福音の本質についてです。このように6節の残りの部分で記されていました。「あなたがたが神の恵みを聞き、それを本当に理解して以来そうなのです。」コロサイの人たちは「神の恵み」を聞きました。福音の本質、それは「神様の恵み」でした。コロサイの兄弟姉妹たちは その真理というものをただ耳にしたわけではありません。彼らはそのことを自分のこととして理解して、受け入れていました。皆さん、「恵み」って何です？「恵み」というのは、本来価値のない者に与えられるもの、それが「神様の恵み」でした。それこそが福音の核心だということです。

私たちがこの恵みについて考えるときにいつも思い出さなくてはいけないことは、私たちが救われる以前どのような姿だったのかということです。救われる以前の私たちはどんな状態にあったのかということです。いま一度、思い返してみてください。みことばは私たちにはっきりと教えてくれました。私たちはみな例外なく、自分の罪過と罪の中に死んでいた者だったのだと。エペソ2：1-3「1



あなたがたは自分の罪過と罪との中に死んでいた者であって、<sup>2</sup> そのころは、それらの罪の中にあってこの世の流れに従い、空中の権威を持つ支配者として今も不従順の子らの中に働いている霊に従って、歩んでいました。<sup>3</sup> 私たちもみな、かつては不従順の子らの中にあって、自分の肉の欲の中に生き、肉と心の望むままを行い、ほかの人たちと同じように、生まれながら御怒りを受けるべき子らでした。」と。本来なら、創造主なる神様によってその栄光を現す者として造られた私たち。この方に仕え、この方を愛し、この方に喜んで従っていく者として造られたそんな私たち。しかしそんな私たちは生まれながらに神様に従っていくのではなく、この方に背いて心の望むままを歩んでいました。だれひとりとして神様を求めようともしませんでした。自分の好きなように生きていくことが何の問題もないと考えて、神様のことなど一切省みることもなく、聖い神様の前に頑なに逆らい続けていました。すべての人がこの方の前に忌み嫌われるそんな罪を積み重ねていたのです。ここに例外はひとりとしていませんでした。みことばが言うように、「義人はいない。ひとりもない。」のだと。(ローマ3：10) すべての人が罪によって墮落した存在だったということです。ジョン・カルバンもこんなことばを残していました。「私たちは罪の力によって完全に支配されている。知性の全て、心の全て、私たちの振る舞いの全てがその影響下にあるのだ。」と。生まれながらの人間はみな、知的な部分においても、感情やまた動機の部分、行いにおいても、そのすべての面において、罪によって汚れているそんな存在でした。だからこそ罪人である私たちはみな、その罪のゆえに義なる神様の御怒りを受け、たださばかれて当然の存在だったのです。自分の罪ゆえに、一切の悪を憎んでおられる、一切の汚れを赦すこともないそんな聖い神様から引き離されて、永遠に滅んでしかるべき存在でした。そして私たちは何よりも、罪の中に死んでいたからこそ、自分の力で自分を救うことなんて到底できなかつたのです。死んだ者には何も出来ませんでした。私たちには文字通り、この状況を変える術は一つとして残されていなかったのです。自分たちには何にもできない、希望の一切ない状況でした。でも、そんなどうしようもない私たちに対して、ほかのだれでもない神様が大きな愛を示してくださいました。私たちではありません。私たちには何もできませんでした。罪の中に死んでいた私たちに対して手を差し伸べてくださったのは、ただ恵みによる神様のみわざでした。キリストにあるいのちを与えてくださったのは、ただ神様のあわれみでした。先の続きにこう書いています。エペソ2：4-5「<sup>4</sup> しかし、あわれみ豊かな神は、私たちを愛してくださったその大きな愛のゆえに、<sup>5</sup> 罪過の中に死んでいたこの私たちをキリストとともに生かし、——あなたがたが救われたのは、ただ恵みによるのです。——」だれひとりとして主の慰めやあわれみを求める資格などありませんでした。私たちは死んでいたのです。私たちには、そのようなものは到底価しないものでした。価するのは、ただ神様の正しいさばきでしかなかったのです。しかしそんな者のために、神様は本来価するものではなくて、本来価しないものを与えてくださいました。皆さん、それこそが神様の豊かな恵みだったのです。価しない者に与えられた豊かな恵みでした。ほかのだれでもない神の御子イエス・キリストが人としてこの地上に来てくださって、この方が私たちの罪を負って十字架にかかってくださいました。この方が私たちの身代わりとなって神様の御怒りをなだめてくださったのです。そして、この方は確かに死に、墓に葬られました。でも約束されていたとおりに三日目によみがえってくださり、この偉大な救いのみわざを完成されたのです。そしてご自身のもとに悔い改めと信仰持ってやって来る者に罪の赦しを与える、とそう約束してくださいました。こうして、いのちの源であるキリストを信じた者には、この方にあって、いのちが与えられました。イエス・キリストの十字架と復活こそ、私たちにはどうすることもできなかったその罪の問題を解決することのできた唯一のものだったのです。これが私たちに示してくださいました神様の偉大な恵みでした。

しかし、これですべてが終わりでもありませんでした。キリストを信じて、後は自分の好きなようにしていくわけではなかったのです。新しいいのちを与えられた者たちは、その後も、変わらずに恵みに抛り頼みながら、神様に従って生きていこうとする者に変えられました。確かに、かつて私たちは罪に



支配されていました。悲しいことに今でもなお罪を犯してしまうことが多々あります。私たちが知っているのは、今私たちがキリストのうちにあるなら、私たちはその罪の支配から解放されて、キリストに従う義の奴隷として歩んでいるということです。そのような歩みが可能な者へと変えられました。ローマ書6：6-7また11節にこう書いています。「6 私たちの古い人がキリストとともに十字架につけられたのは、罪のからだが減びて、私たちがもはやこれからは罪の奴隷でなくなるためであることを、私たちは知っています。7 死んでしまった者は、罪から解放されているのです。」「11 このように、あなたがたも、自分は罪に対しては死んだ者であり、神に対してはキリスト・イエスにあって生きた者だと、思いなさい。」と。皆さん、私たちは、ただ恵みによって救われました。恵みによって今を生かされています。私たちを救い出してくれたものは、キリストの福音でした。だからこそ、もしまだこのキリストの福音を知らない方がおられるなら、自分のこととして本当には知っていない方がおられるなら、どうかきょう帰る前に知ってください。私やあなたのような罪人のために、ご自身のいのちをみずからささげてください。救い主イエス・キリストのもとに助けを求めてください。このイエス・キリストのうちのみ、救いがあります。このような偉大な救い主であるこのお方の前に、神様の前に、自分の罪を悔い改めて、そしてイエス様を自分の救い主として、自分の主人として、自分の主として信じ受け入れてください。そして、この方のために生きる人生を始めてください。そこにこそ、本当の喜びが、慰めがあります。

また、この救い主をもう既に信じ従っておられるという兄弟姉妹の皆さん、果たしてどうでしょう？ 私たちはきょうこうして福音の持っているその偉大な力について、パウロのことばから考えてきました。私たちが罪の中に死んでいたその時に、私たちを新しく生まれ変わらせることのできた偉大な力を持った福音、信じるすべての人を救うことのできるそんな神の力であるその福音、そんな偉大な力を持った福音を私たちが知っているのだとすれば、それによって自分も救われたということを実に知っているのだとすれば、私たちがどのようにしてこの福音を持って生きて行こうとすべきでしょうか？ もちろん、私たちがいろんなことができます。でも何よりも私たちはいつも感謝し続けることができます。私たちがこの福音を覚えるときに、私たちがかつてキリストを知る前にどんな存在だったのか、そしてその状態から救い出さされたその福音の凄さを考えるときに、私たちがいつでも感謝することができます。いつでも感謝することができる理由を、そこに見出すことができます。恵みによって私たちは救われたのです。価しない者に与えられたことを思い出し続けることです。そのようにして感謝し続けることです。

でも皆さん、同時に私たちは感謝し続けるだけではありません。私たちは大きな責任を負っています。私たちは信じるすべての人に救いをもたらす、その神の力である福音を大胆に宣べ伝えていくという責任を負っているのです。だからこそ、いつも覚えることです。どんなに偉大な力を福音が持っているのか、ということなのです。もし恐れを抱くことがあるなら、もしためらいを抱くことがあるなら、祈ることです。そしてみことばを見ることです。パウロは「福音を恥とはしません。」と言いました。それは、彼に力があつたからではありません。福音が持っているその力に目を留めたからです。だから私たちも、そこに目を留めることです。そこに、私たちも希望を見出し、勇気を見出すことができます。そのようにして福音を大胆に語る群れとして一緒に歩いていきましょう。